

第6学年 国語科の実践

- 1 単元名 作品の世界をとらえ、自分の考えを書こう「やまなし」[資料 イーハトーヴの夢]
(全12時間 本時10時間目)

2 単元目標

- 文章を読んで理解したことに基づいて、自分の考えをまとめることができる。
- 比喻や反復などの表現の工夫に気づくことができる。
- 人物像や物語の全体像を具体的に想像したり、表現の効果を考えたりすることができる。

3 「ひびきあう三の丸の子どもたち」をめざすための指導の工夫

研究課題「子どもが解決したい問題を持ち、友だちとひびき合いながら学習する子どもの育成」
手だて・・・子どもの思いや願いを見とった単元構想と授業づくり
高学年ブロックテーマ「仲間への理解、自立する自分」
・仲間を理解しつつ、自分の思いも大切にする姿
・新しい価値観にふれ、自分を再構築する姿

<聴く・話すについての指導>

学習活動をはじめ、学校生活の様々な場面で、「聴く・話す」を意識した活動を取り入れている。考える時間を保障し、自分の出番を考え質問したり、意見を言ったりすることができる学び合いにしていきたいと考え、指導を重ねている。話し手として、どの言葉を使えばよいのか、どのような順序立てで相手に伝えればよいのか常に考えながら話ができるようにしている。また、教師の発問や友達の考えに対して、自分の考えと比べながら聴いたり、分からないことを質問したり、思ったことを伝えたりするよう促し、「聴く」ことの大切さを指導してきた。相手意識をもった「聴く・話す」活動にしていく中で、聴くことのよさを味わうとともに、自分の話を聴いてもらえる心地よさを実感できるようにしている。また、国語「聞いて、考えを深めよう」の学習を継続し、「ミニトーク」として、話題に沿って話し合いをする場を毎週設定し、取り組んでいる。

<これまでの関わり合い・ひびき合い>

ペアやグループでの活動や話し合いでは、進んで友だちと関わり合う場面が多く見られるようになってきた。教え合ったり、質問し合ったり、友達の意見を言い換えたりする姿もある。しかし、全体での話し合いでは、話し手の相手意識や聴き手の受容的・共感的姿勢にまだまだ課題がある。相手意識をもって話したり友達の意見につなげて考えて聴いたりする場面が少しずつではあるが見られるようになってきたが、ひびき合いには至っていないのが現状である。代表委員会の議題、クラスイベント、総合的な学習の時間の活動内容などについては、活発な話し合いになることが多い。自分の生活に直接関係する事柄や、興味がある話題、全員の考えが反映されなければいけないと子どもたちが考えるものに対しては、意欲的に話し合うことができる傾向にある。学習の場面においては、反対・賛成などの意見が分かれるような問題や、正解が誰も分からないような問題などを扱った学習場面に対して、意欲的に相手の話を聴こうとし、自分の考えを深めようとする様子が見られ、普段は控えめな子どもの参加意欲も高い。なるべくみんなが意欲的に参加できるような問題を学習場面で設定し、話し合ったことが自分の考えや認識・感覚を構築することにつながるよう努力しているところである。

4 単元と指導について

<単元について>

本単元の設定（学習指導要領 国語 第6学年）

〔思考力、判断力、表現力等〕

C 読むこと

- (1) エ 人物像や物語などの全体像を具体的に想像したり、表現の効果を考えたりすること。
オ 文章を読んで理解したことに基づいて、自分の考えをまとめること。

〔知識及び技能〕

- (1) ク 比喩や反復などの表現に工夫に気付くこと。

本単元の教材文「やまなし」は、「私」による一人称視点で書かれた外枠と、三人称の客観的な視点で書かれた「五月」「十二月」の2枚の幻灯という額縁構造になっている。谷川の底から見た水中の世界が、「五月」と「十二月」とを対比させながら、宮沢賢治独特の色彩豊かな表現で描かれている。それら構成・表現の面から作品世界を捉えることを通して、作者の思いと重ねて自分の考えを形成することに主眼を置く。資料「イーハトーヴの夢」を手がかりにしながら、自分がこの作品を読んで何を感じ、何を考えたかを表現する。作者の深い自然観や生命観への理解を背景に、「やまなし」をどう読んだのか、考えをまとめていきたい。美しく幻想的な谷川であるが、ここは「奪うものと与えるもの」「生と死」が交錯する生存競争の場でもある。作者の信念や生き方と重ねることで、人間の内面や人生観にも迫るような読書体験をさせたい。

<指導について>

本単元の学習に入る前に、読み聞かせをして宮沢賢治作品と子ども達とを出会わせる。共通の読書体験を土台に、「宮沢賢治さんの他の物語も知りたい。」「『やまなし』は、どんな物語だろう。」と知的好奇心をもって本作品と出会えるだろう。また、宮沢賢治作品を学級文庫に充実させ、数多く触れることにより、宮沢賢治の作品世界を子ども達に味わわせたい。

本単元の導入では、「やまなし」の初発の感想を交流し、学習問題をつくっていく。物語の意味が分からないという思いから、「作者は何が言いたいのかな？」という問いが生まれると予想する。その他にも「宮沢賢治はどんな人なのか?」「『五月』と『十二月』の違いは何か?」「なぜ『やまなし』という題名なのか?」などの問いも出てくるだろう。資料「イーハトーヴの夢」を読んで知る宮沢賢治像と「やまなし」の世界とを結びつけ、「やまなし」の主題へと迫っていきたい。

ノート指導については、単元を通して問いに対して、個々で考えをノートに書く・全体で考えを共有する・再び自分の考えをノートに書く、というサイクルをとっていく。全体での関わりを通じて、自分の考えの深まったことがより実感できるのではないかと考える。また、単元を通しての問い「作者は何を伝えたいのか」について、単元途中のいくつかの問いを考える度に、考えを改めてノートに書いていく。資料の読みや本文の読みが深まると共に考えも深まっていくことに気付かせたい。

本時に子どもが解決したい問題は、宮沢賢治は「やまなし」を通して何を伝えたかったのだろうか?である。「やまなし」の物語の不思議さや分からなさから、「作者は何が言いたいのか」については初発の感想でも出てくるものと思われる。資料「イーハトーヴの夢」から見える宮沢賢治の姿と、物語の「五月」と「十二月」を比較して読み取った上で、「作者は何を伝えたかったのか」という主題について考えたいという思いを高めると考える。子ども達は、宮沢賢治像から想像して考えたり、本文「やまなし」の二つの場面の比較から考えたりするだろう。そして、それまでに読み取ったことや叙述に基づいて主題についての考えを話し合うことを通して、作品の世界を自分なりに捉える姿をひびき合いの姿とする。宮沢賢治の考え方や生き方、「やまなし」の「五月」と「十二月」の比較など、学習を通して読み取ったことをふりかえることができるよう、学習の足跡を掲示したり、子ども達の発言やつぶやきに問い返しをしたりできるようにする。主題についての話し合いをもとに、宮沢賢治の作品世界を捉え、作者の背景に着目して物語を読む楽しさを感じられるようにしたい。

5 単元構想 6年国語 作品の世界をとらえ、自分の考えを書こう「やまなし」[資料 イーハトーヴの夢] (全12時間)

単元目標

- 文章を読んで理解したことに基づいて、自分の考えをまとめることができる。
- 比喩や反復などの表現の工夫に気づくことができる。
- 人物像や物語の全体像を具体的に想像したり、表現の効果を考えたりすることができる。

読書タイムなど

宮沢賢治作品の読み聞かせ・読書

・他の物語も知りたい

学級文庫の充実をはかる。

宮沢賢治作品

「風の又三郎」「グスコーブドリの伝記」「セロ弾きのゴーシュ」「銀河鉄道の夜」「注文の多い料理店」

「やまなし」はどんな物語だろう？ (①②)

題名読み・全文通読・初発の感想をもとう ①

- ・やまなしって何かな
- ・山の梨かな
- ・山梨県に関係ある
- ・挿絵の感じが水の中みたい
- ・海や川の話かな

・挿絵が宇宙や星みたい
・黒い影はなんだろう

挿絵を用意して、
想像を広げられるようにする

宮沢賢治はどんな人なのだろう？ ③④⑤

宮沢賢治の生き方や考え方を
知る
(「イーハトーヴの夢」や資料)

出来事や言動、作品を書いた時期に着目する

宮沢賢治はどんな人なのか

作品の特徴について

- ・岩手という場所で育ったことが
生き方に影響している
- ・自然災害についての体験が、
農業や作品作りに関係している
- ・一つのことにじっくり真剣に
取り組む性格

- ・植物、動物、人間が互いに思いやり
生きていく世界を求めている
- ・生と死について、考えを強くもっている

・宮沢賢治は何を伝えたいのかな
・人々に優しさを育ててもらうために、
死や童話を書いた
・自分の命を犠牲にして
意志を貫いた

「五月」「十二月」の違いは何だろう？ ⑥⑦⑧

情景描写や比喩表現に注目して比べて読む

作品の冒頭と末尾にある「幻灯」という言葉

<五月の谷川の様子>

美しい比喩 春 日光 明るい

クラムボンの正体 (生き物 妹トシ あわ)

カニの親子にとっての

「カワセミ」の存在意味

怖い 死 命を奪う

弱肉強食 ↑美しい自然↓

<十二月の谷川の様子>

あたたかい比喩 冬 月光 暗い

カニの兄弟の成長

カニの親子にとっての

「やまなし」の存在意味

楽しむ 喜び 生 命を与える

・宮沢賢治は何を伝えたいのかな

語のリズムや表現
の持つ美しさ、比
喩などの表現上の
特色に気づくこ
とができる【知】

心をひかれる表現
をもとに、谷川の
情景を具体的に想
像することができる【思】

作者は何が言いたいのかな？
(宮沢賢治は何を伝えたいのかな？)

初発の感想を交流しよう ②

- ・これまでの物語とは違う感じ
- ・不思議な話
- ・挿絵がはっきりと描かれていない
- ・作者は何が言いたいのかな
- ・作者はどんな人なのかな
- ・「イーハトーヴの夢」にヒントがありそう
- ・最初と最後に「幻灯」とある
- ・五月と十二月の場面がある
- ・なんで五月と十二月なのかな

- ・言葉や表現がおもしろい
- ・たとえが多い
- ・いろいろな色が出てくる
- ・やまなしってどんなものかな
- ・なんで題名が「やまなし」なのかな
- ・クラムボンって何かな
- ・カニが主人公
- ・なんで魚はうろうろしているのか
- ・青白い炎は何のことかな

・読んだことない感じ
・よく分からない
・意味が分からない

・五月はこわい
・五月から十二月の展開が急だ

・クラムボンは笑ったり死んだりして人間みたい
・主人公はだれかな
・ラムネのびんの月光ってどんなかな

感想交流の中で、
感想が集中してい
るところや、ずれ
のあるところを整
理し、解決してい
きたい問題を明確
にしておく

文章を読んで理解
したことに基づい
て、感想をもつこ
とができる。【思】

宮沢賢治は「やまなし」を通して何を伝えたいのだろうか？ ⑨⑩ (本時)

- ・死のおそろしさと生の喜び
- ・生と死について
- ・自然の怖さとすばらしさ
- ・誰かの役に立つという生き方
- ・平和な世界

作者が「やまなし」に込めた思いに
ついて考えをもち、話し合うこと
を通して、作品の世界を自分なりに捉
えることができる。【思】

「やまなし」の初期
形の資料を提示し、
宮沢賢治が作品に
「死」のイメージを
強めて完成させたこ
とや生き方と作品に
関連があることに触
れ、作品世界を捉え
られるようにする。

宮沢賢治はなぜ「やまなし」という題名をつけたのだろうか？ ⑪

- ・自然は厳しいけど優しさもあることを伝えたい
- ・自然の恵みや美しさ
- ・平和な世界を願うことから
- ・絶望ではなく希望をもってもらいたい
- ・誰かの役に立つという生き方
- ・人に喜びを与える生き方

捉えた作品世界
をもとに、作者が
題名を「やまなし」とした意味に
ついて考えをも
つことができる
【思】

学習感想を交流しよう ⑫

- ・作者のことを考えながら作品を読むことができた
- ・「五月」と「十二月」を対比して読むと、違って見えた
- ・作者の生き方や考え方を知ることができたこと
- ・作者の背景に着目して物語を読むことはおもしろい
- ・宮沢賢治の他の作品はどんなだろう
- ・他の作者についても気になるな

宮沢賢治の他の作品や他の作者の作品世界を楽しもう

読書を広げる

単元全体をふりかえるとともに、
作品世界を想像しながら進んで
読書をしようとしている【態】

6 本時について

本時目標 作者が「やまなし」に込めた思いについて考えをもち、話し合うことを通して、作品の世界を自分なりに捉えることができる。

学習活動	主な支援・留意点 ◆評価【観点】
やまなし 宮沢賢治は何を伝えたかったのだろうか？ 小さな谷川の底を写した、二枚の青い幻灯です。 五月 十二月 わたくしの幻灯は、これでおしまいです。 自然は厳しいけど優しさもある 自然のこわさとすばらしさ 自然の恵みや美しさ 平和な世界を願う 幸せになってほしい 誰かの役に立つという生き方 生と死 死のおそろしさと生の喜び 「やまなし」の ・初期形 ・完成形 トシの死 死のイメージを強調 宮沢賢治の生き方と作品	・学習の足跡を残し、話し合うときにふり返ることができるようにする。 ・前時までの読み取りや叙述をもとにして、根拠を示しながら、考えや根拠の共通点や相違点に着目して、話し合うことができるようにする。 ・出てきた言葉をもとに、考えの違いが視覚的に捉えやすいように板書を整理する。 ・「やまなし」の初期形の資料を提示し、宮沢賢治が作品に「死」のイメージを強めて完成させたことや生き方と作品に関連があることに触れ、作品世界を捉えられるようにする。 ・本時の最後に、再度問いに戻り、考えをノートに書く時間をとる。本時の話し合いを生かし、作品について自分の考えを書けるようにする。 ◆作者が「やまなし」に込めた思いについて考えをもち、話し合うことを通して、作品の世界を自分なりに捉えることができる。 【思考・判断・表現】

7 実践を終えて

本単元の導入で初発の感想を交流し、「宮沢賢治は何が言いたかったのだろうか？」という学習問題をつくった。資料「イーハトーヴの夢」から、作者の信念や生き方を知り、物語の「五月」と「十二月」を対比させながら、作品世界を捉えていった。作者の人物像と物語の世界を結びつけていく中で、学習問題は「宮沢賢治は何を伝えたかったのだろうか？」に変化していった。物語の不思議さや分からなさから出た問題をきっかけに、資料や物語を読み深めていくことで、主題について考えたいという思いを高め、子ども達の解決したい問題となっていった。

本時では、それまでに読み取ったことや叙述に基づいて主題についての考えを話し合った。一人ひとりが考えをもち、それぞれ話しの流れに沿って聴き合い、話すことができた。子ども達の反応やつぶやきをもとに、子ども同士や教師が話し合いをつなげることができると、さらに話し合いが深まったと考える。また、主題に迫るための資料として、「やまなし」の初期形と完成形を提示した。資料を読み取る時間が短くなってしまったので、しっかりと時間を確保し、考えを深めることにつなげられるとよかった。

〈成果〉

- ・それまでの学習をもとに、一人ひとりが自分なりの考えをしっかりともち、話し合いの流れに沿って、互いの考えを聴き合い話す姿が見られた。
- ・物語の内容だけでなく、作者の生き方を知る資料「イーハトーヴの夢」を読み取っていくことが物語への理解とつながっていった。また、そのことを子ども達自身が実感し、学習感想等に表していた。
- ・単元を貫く大きな問いに対して、くり返し考えをもちノートに書いていくことによって、子ども達自身が考えの変化に気付いたり、整理したりすることができていた。

<課題>

- ・子どもが友だちの考えとの違いやずれをもとに話し合うことができると、よりよいひびき合いの姿へと近づくと考える。話し合いを深めるため、教師が子どもの反応に立ち止まったり、発言した内容を問い返したりすることも適切に行っていくとよい。また、考えが変わったことが分かるような板書の工夫もあるとよいと思った。
- ・本時の資料について、話し合いが途切れた場面での提示となってしまった。話し合いの流れの中で提示し、読み取る時間をしっかりと確保できると、子ども達なりに考えを深めるきっかけとなったと思う。子ども達の思考の流れが途切れることなく単元のねらいに迫っていけるよう、計画を十分に練っていききたい。また、資料から読み取れる「やまなし」の主題について、「死」のイメージを強調してしまった部分があったので、教師自身が幅広い思考で教材研究し、生かせるとよいと感じた。

本時資料→

『やまなし』（初期形 一九二一年） 魚がこんどはそこら中の黄金の光を まるつきりくちやくちやにしておまけに自分は まばゆく白く光って 又上流の方へのぼりました。 「い、ねえ。暖かだねえ。」 「い、ねえ。」 「お魚はなぜあゝ行ったり来たりするんだらう。」 「お魚は早いねえ。」 その魚がまた上流から戻って来ました。今度はゆっくり落ち着いて 水にだけ流されて やつて来たのです。その影は黒くしづかに砂の上をすべりました。 宮沢賢治『新校本宮沢賢治全集 第十卷』（筑摩書房）	『やまなし』（完成形 一九二三年） 魚がこんどはそこら中の黄金の光を まるつきりくちやくちやにしておまけに自分は 鉄色に変に底光りして 又上流の方へのぼりました。 「お魚はなぜあゝ行ったり来たりするんだらう。」 弟のかにが、まぶしそうに目を動かしながたずねました。 「何か悪いことをしてるんだよ。取ってるんだよ。」 「取ってるの。」 「うん。」 その魚がまた上流から戻って来ました。今度はゆっくり落ち着いて ひれも尾も動かさず、ただ 水にだけ流されて お口を輪のように円くして やつて来たのです。その影は黒くしづかに砂の上をすべりました。 宮沢賢治『新校本宮沢賢治全集 第十卷』（筑摩書房）
---	--